

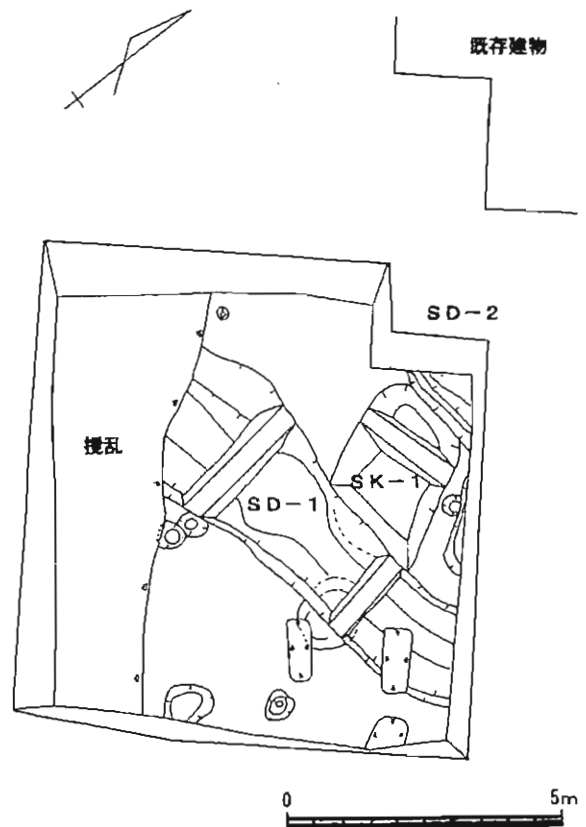
はじめに

新年 明けましておめでとうございます。^{えと}干支は、猪さん（亥）から鼠さん（子）へとバトンが渡りました。今年は、どんな発掘・発見があるのでしょうか。入門講座・体験学習・友の会の活動ほか 皆で頑張りますので、ご支援、ご参加をお願いいたします。

☆ 発掘調査だより ☆

1 山田町遺跡(3次)の調査 (調査終了)

旧守山女子高校跡にて、11月中頃から下旬にかけて（仮称）生涯学習・教育センター増築に伴う発掘調査を実施しました。その結果、旧校舎の基礎によって一部が攪乱を受けていましたが、溝、土坑、ピットを検出しました。溝（SD-1）からは、上層から中層にかけて平安時代の土器が、下層で弥生時代中期末の土器が出土していることから、2時期に流れていたものと考えられます。溝（SD-2）、土坑（SK-1）からは弥生時代中期末の土器が大量に出土しました。今回の調査地は弥生時代中期末の集落、山田町遺跡の東端になります。検出した溝が山田町遺跡の環濠になるのかどうか、今後の調査によって検討していく必要があります。（森山）



▲山田町遺跡(3次)調査平面図

2 大門遺跡の調査 (調査中)

昨年12月中旬から大門町地先で宅地造成工事に先立ち発掘調査を実施しています。現在は調査地の西半分を調査していて、主に平安時代のピットや溝を検出しています。ピットの中には土師器皿が何枚も重ねて埋められたものもあります。調査は2月上旬まで行う予定ですので、詳細は次号の乙貞で報告したいと思います。（森山）



▲大門遺跡出土の土師器皿

3 欲賀遺跡・欲賀南遺跡の調査 (終了)

区画整理工事及び宅地造成工事に伴い、平成15年7月から実施してきた発掘調査も昨年11月末で終了しました。この間、何度か新聞等で話題になるなど多くの成果をあげることができました。ここではその成果について、時代別に簡単にまとめてみます。

欲賀遺跡・欲賀南遺跡は、守山市の南部に位置し、野洲川の旧主流であった境川の右岸微高地（やや小高い土地）に立地しています。境川は古代に旧野洲郡と旧栗太郡を分けた川で、^{ようしょう} 一帯は交通の要衝であったと考えられています。この境川を望む小高い土地から縄文時代～室町時代にかけての遺跡（人間の営みの跡）が発見されたのです。

縄文時代

欲賀南遺跡では、境川近くで検出された自然流路や土坑（大きな穴）^{しぜんりゅうろ} ^{どこう} などから縄文時代晩期（約2,500年前）の土器が出土した他、まつりの道具とみられる石棒などの石器もみつっています。この頃、欲賀南遺跡に初めて人間が住んだと考えられます。

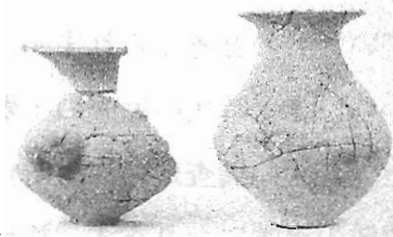
▲ 石棒



弥生時代

欲賀南遺跡では、弥生時代前期末の壺2点が土坑から出土しており、弥生時代の比較的早い段階で米づくりを行う人々が住み着いた可能性が考えられます。また、中期の竪穴住居からは矢の先につける磨製石鏃（表面を研磨し、滑らかにした石鏃）の製品・未製品や石材である粘板岩と打製石鏃の材料になるサヌカイトも見つっています。他地域から入手した石材を使って住居の周辺で石器の加工を行っていたと考えられます。この他、中期から後期の方形周溝墓も確認しており、集落に近接して墓域も造られていたことがわかります。

▲ 弥生土器「壺」



古墳時代

欲賀南遺跡では、古墳時代初頭から前期にかけての円墳1基（直径約25m）と一辺10m～20m程の方墳が数基見つかった他、古墳時代後期の竪穴住居も検出されています。また、北に隣接する欲賀遺跡では古墳時代後期の古墳が2基（直径約20m）^{しゅうごう} ^{みこがた} みつかり、周濠から巫女形、人物（男子）形、鶏形、家形などの形象埴輪や円筒埴輪（古墳の上に並べ置かれた土管状の埴輪）の破片も出土しました。中でも巫女形埴輪は県内でも珍しく、発見当時は大変話題になりました。これらの古墳は一帯を治めた地方豪族のものとみられ、境川を見下ろす小高い場所に築造されたと考えられます。

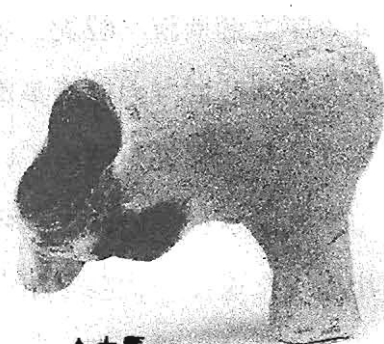
▲ 巫女形埴輪



奈良時代

欲賀南遺跡では、^{びこうちじょう}堅穴住居や掘立柱建物がみつかり、^{びこうちじょう}微高地上に集落が営まれていたことがわかりました。

出土遺物には銅製帯金具や小型の銅鏡^{どうきやう}の他、屋根瓦が少量あります。瓦は当時、宮殿や役所、寺院などに使用されたもので、欲賀南遺跡の周辺に寺院や役所に関係する施設があった可能性が考えられます。また、市内では珍しい土馬^{どば}（頭部、前足、右後足を欠損）も出土しています。土馬は雨乞いや悪い神を封じ込める祭りなどに使用されたとする考えがあり、当時の人々の精神文化を考えるうえで興味深い資料です。

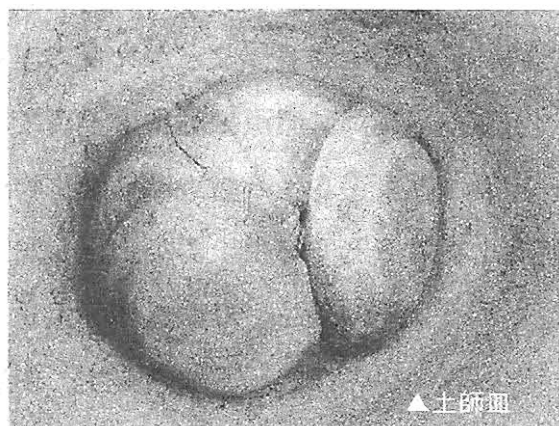


▲土馬

平安時代～鎌倉時代

欲賀南遺跡では、平安時代後期～鎌倉時代の建物や井戸、溝などが広い範囲から検出されており、当初の想定よりも広範囲に集落が広がっていることがわかり

ました。また、銅造十一面観音立像や石塔の一部



▲土師器

^{そうりん}（相輪）の出土から、寺院が存在した可能性も考えら

れます。その他、遺構では地鎮^{ちちん}の跡とみられる穴（十数枚の土師器^{はじき}が埋納されていた。）や割れていない食器群が出土した溝（祭礼や儀礼に伴う共同飲食の後埋められた？）、遺物では大量の土器^{どうせん}、銅銭^{どうせい}、土錘（魚網のおもり）^{もくせいはいし}、木製箸、曲物（容器）^{まげもの}など当時の生活習慣考えるうえで、貴重な資料が多く出土しました。

室町時代

欲賀遺跡では鎌倉時代の集落を壊した形で、溝で囲まれた屋敷跡が見つかりました。屋敷跡は幅5m程の大溝で区画されており、溝の内側から建物跡や井戸跡が検出されました。屋敷地の規模は一辺50mを超えるものであり、これまで欲賀



▲井戸

遺跡や北側に隣接する欲賀城遺跡で確認されている中世の屋敷群のひとつと考えられます。15世紀にかけて規模の大きな有力者の屋敷がつくられていったことがわかります。また、この時期の遺構は欲賀神社の東側や南側でも見つかっており、欲賀南遺跡の一部にも集落が広がっていたことが確認されました。埋蔵文化財センターでは、ゴールデンウィーク頃に欲賀・欲賀南遺跡調査成果展の開催を予定しています。縄文時代から室町時代までの出土資料を展示し、調査から得られた数々の成果を市民の皆様に公開したいと思います。ゴールデンウィークには春風の中、ぜひ埋蔵文化財センターまでお出かけ下さい。（小島）

4 下之郷遺跡（62次）の調査（調査中）

下之郷遺跡では、環濠集落の東端部分で史跡整備に先立つ発掘調査を進めています。調査では6条の環濠が検出されています。今号では環濠（SD-1）から出土した遺物の状態を紹介します。

下之郷遺跡の環濠で、最も規模の大きいものは一番内側の環濠です。幅は7～8mもあり、深さは今回の地点では2.5m以上にもなる場所がありました。

環濠には、弥生人が使っていた土器や木製品の他、動物遺体や植物遺体などが大量に埋もれています。

右の写真は、環濠掘削中の写真ですが、上層から中層（写真①5～8層）は、炭化物や有機質土による土層で石器や弥生土器が出土します。さらに掘り下げると、木製品や自然遺体が大量に含まれる中層（写真②14～16層）となります。中層は、環濠に水が溜まっていたときに遺物が投棄され、その後埋まった状態が確認できます。出土した木製品には、竪杵、建築材、背負い板、農具未成品などがあります。

そして、その下層（写真③21～22層）においては、木製品や動植物遺体が多量に埋積しています。下之郷遺跡の環濠調査の魅力は、豊富な動植物遺体が埋もれていて、弥生人の生活や集落周辺の自然環境が復原できることです。今回の調査でも、コイやフナなどの骨格や琵琶湖や河川に生息している貝類、シカやイノシシなどの骨格が下層から最下層にかけて見つかっています。また、環濠からは土器や石器、木器などのほかに花粉分析用の土壌サンプル（周辺植生変化を調べる）や、珪藻分析用の土壌サンプル（どのような水生植物が繁殖していたかをさぐる）などを採取しており、環濠が掘られてから埋もれるまでに、どのような経過をたどったのか、さらに詳しく調べていきたいと思っています。（川畑）

環濠（SD-1）の調査

